





二 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

①「合わなかったんだよ、考え方が」

考え方って、と、何か言いたげな理香りかさんに気にも留めず、誰かに言い訳をするように隆良たかよしは続けた。

「俺はもつと企画に関してじっくり考えたいから、公演の時期をずらそうって提案したんだよ。でも向こうがそれは無理だって。公演は毎月必ず行うからって言うって、最後まで聞かなかった」

瑞月みづきさんが、ペットボトルに残っていたジンジャーエールを飲みきった。

それはまるで、隆良の渴いた喉に水分を与えないようにしているようにも見えた。

「……俺は絶対にもつと考えた方がいいと思った。だって正直、公演の内容もそこまで面白いものになってなかったし。もつと考えて、煮詰めて、最高のものをお客さんに提供すべきだって俺は思っただよね」

誰も質問を追加してはいないのに、隆良はひとりで話し続ける。

「だけど向こうは、それじゃダメだって。どうしても譲らないわけ。おかしいなと思って、周りの演劇ファンに評判を聞いてみたら、あの劇団って、今までもそうだったんだってな。質の低いものを量産してて、結構叩かれてるんだって。数撃ちや当たると思ってるとか、テーマが似てきてるとか、結局は学生劇団の枠から出られてない、とか」

(中略)

「そうやって考えたら、会社に入るとかってホント、俺には向いてないんだなって思っわ」  
就活なんてしなくて正解、と、言うと、隆良は後ろの壁にもたれた。今日も部屋着に見えない部屋着を身に付けている。

「どうしてそう思うの？」

ひゅんつとボールでも投げるみたいに、どこからか声が飛んできた。

瑞月さんが、隆良のことをまっすぐ見つめている。

「だって会社って、考え方が合うわけでもない人たちと同じ方を向いて仕事しなくちゃいけないんだろ？」  
煙草たばこが欲しくてたまらないのだろう、隆良はひとさし指で床の上をとんとん叩いている。

「その方向っていうのも、会社が決めた大きな大きな目標なわけで。納得せずに、自分を殺して、毎日毎日朝から晩まで働くって、そんなの何の意味があるんだよって俺は思う。自己実現が人間にとって一番大切だって、どこかの哲学者も言ってただろ」

ジコジツゲン、と光太郎が子どものように繰り返す。

「今回のことだって、無理やり向こうのペースに合わせてコラボ展やったって、作品の価値が落ちるだけだろ。俺、それは違うと思うんだよ」  
隆良はすうと息を吸う。

「十点、二十点のものをお客さんに見てもらうなんて、そんな失礼なこと俺はできないから」

隆良の話がひと段落すると、部屋の中が静かになった。光太郎が、スーパーの白いビニール袋の中に空いたビールの缶を入れる。いつもみたいに、空き缶をくしゃつと潰つぶすことはしなかった。

「ちよつと、煙草買ってくる」

隆良が腰を浮かす。このままこの話が終われば、隆良が正しいことになる。そうするわけにはいかない。

「あつち」

「ねえ」

すぐ隣から、俺の決意④を押しつけるような声が出た。

「隆良くんその考え方は、たくさんたくさん考え抜いたうえで生まれたものなんだよね？」

瑞月さんだ。

「そうだったら、いい。けどもし、そうじゃないんだったら聞いてほしい」

「瑞月？」理香さんが不安そうな声を漏らす。

「私ね、わかったことがあるの」

瑞月さんは、理香さんの呼びかけを全く気にしない。

「最近思ったの。<sup>⑤</sup>人生が線路のようなものだとしたら、自分と全く同じ高さで、同じ角度で、その線路を見つけてくれる人はもういないだって」  
瑞月さんはまっすぐに隆良を見つめている。

「生きていくことって、きつと、自分の線路を一緒に見てくれる人数が変わっていくことだと思っの」

隆良は立ち上がりかけた自分の体をどうしていいかわからないらしく、中途半端な姿勢のままそこにいる。<sup>⑥</sup>

「今までは一緒に暮らす家族がいて、同じ学校に進む友達がいて、学校には先生がいて、常に、自分以外に、自分の人生を一緒に考えてくれる人がいた。学校を卒業するって言っても、家族や先生がその先の進路を一緒に考えてくれた。いつだって、自分と全く同じ高さ、角度で、この先の人生の線路を見えてくれる人がいたよね」

まるで説得をするような瑞月さんの声は、誰も話さなくなった部屋の中を満たしていく。

「これからは、自分を育ててくれた家族を出て、自分で新しい家族を築いていく。そうすれば、一生を共にする人ができて、子どもができて、また、自分の線路を一緒に見えてくれる人が現れる」

体が、左右に、上下に、小さく揺れているような感覚に襲われる。

「そういうことだと思うんだ。自分以外の人と一緒に見えてきた自分の線路を、自分ひとりで見つめるようになって、やがてまた誰かと一緒に見つめる日が来る。そしてそのころには、その大切な誰かの線路を一緒に見つめてるんだよね」

各駅停車の電車の中で、瑞月さんと、隣同士で座った。あの帰り道のことか、思い出される。

「だから今までは、結果よりも過程が大事とか、そういうことを言われてきてたんだと思う。それは、ずっと自分の線路を見られてる人がすぐそばにいたから。そりゃあ大人は、結果は残念だったけど過程がよかったからそれでいいんだよって、子どもに対して言っておげたくなるよね。ずっとその過程を一緒に見えてきたんだから。だけど」

瑞月さんは言った。

「もうね、<sup>⑦</sup>そう言ってくれる人はいないんだよ」

——私ね、ちゃんと就職しないとダメなんだ。

「私たちはもう、たったひとり、自分だけで、自分の人生を見つめなきゃいけない。一緒に線路の先を見えてくれる人はもう、いなくなったんだよ。進路を考えてくれる学校の先生だっていないし、私たちはもう、私たちを産んでくれたときの両親に近い年齢になってる。もう、育ててもらうなんていう考え方では無理ない」

——私のお母さん、ちょっと弱いんだよね。体っていうよりも、心が。

⑧「私たちはもう、そういう場所まで来た」

電車の中で聞いた瑞月さんの声が、現実のそれとコウ差<sup>a</sup>する。

「ギンジくんと企画の話がなくなった、っていうさっきの言い方ひとつでもそう。まるで自分とは全く関係のないところで話が消え失せたみたいな言い方したよね。何それ、そんなの、地球オン暖化<sup>b</sup>で南極の氷がなくなった、っていうニュースと同じじゃない。自分は何もしてないけど、何かのゲン象<sup>c</sup>がきっかけでなくなった、って、そう言いたいのか？ したこともないくせに、自分に会社勤めは合ってる、なんて、自分を何だと思ってるのか？ 会社勤めをしている世の中の人々全員よりも、自分のほうが感覚が鋭くて、繊細で、感受性が豊かで、こんな現代では生きていき辛<sup>d</sup>いなんで、どうせそんなふうに思ってるんじゃないよ。」

隆良はその場から動かない。

「そんな言い方ひとつで自分を守ったって、そんなあなたのことをあなたと同じように見てる人なんてもういないんだよ。あなたが歩んでいる過程なんて誰も理解してくれないし、重んじてない、誰も追ってないんだよ、もう」

瑞月さんの言葉から滲み出る説得力<sup>e</sup>が、この部屋にいる全員を、がんにがらめにしている。

「ただのバイトのくせに『仕事行ってくる』って言うてみたり、あなたの努力が足りなくて実現しなかった企画を『なくなった』って言うてみたり、本当はなりたくてなりたくて仕方がないはずなのに『周りからアーティストや編集者に向いているって言われてる』とか言うてみたり、そんな小さなひとつひとつの言い方で自分のプライドを守り続けてたって、そんな姿、誰も知らないの。誰も追っててくれないの」

誰も、と、言葉のリン<sup>d</sup>郭<sup>d</sup>をもう一度なぞるように、瑞月さんは繰り返した。

「隆良くんは、ずーっと、自分がいまやっていることの過程を、みんなに知ってもらおうとしているよね。そういうことをいつも言うてる。誰かと知り合った、

誰かの話を聞いた、こういうことを企画してる、いまこういう本を読んでる、こういうことを考察してる、周りは自分にこういうことを期待してる」

瑞月さんは息を吸う。

「十点でも二十点でもいいから、自分の中から出さなよ。自分の中から出さないと、点数さえつかないんだから。これから目指すことをきれいな言葉でアピールするんじゃないかって、これまでやってきたことをみんなに見てもらいなよ。自分とは違う場所を見る誰かの目線の先に、自分のものを置かなきゃ。何度

も言うよ。そうでもしないと、見てもらえないんだよ。私たちは。百点になるまで何かを煮詰めてそれを表現したって、あなたのことをあなたと同じように見ている人はもういないんだって」

瑞月さんはそこまで言っと、我に返ったように口を閉じた。

「うめん」

足元に置いてあったカバンを引つ掴んで、瑞月さんは部屋から飛び出した。それはとても速い動作で、誰も止めることができなかった。

隆良は、まだ、その場から動かない。理香さんは、顔の向きは変えずに、目だけで隆良のことを見ている。光太郎は何も言わないで、じゅうたんのの上に落ちている一口チーズの包み紙を弄もてあそんでいる。

「頭の中にあるうちは、いつだって、何だって、傑作なんだよな」

俺はそう言いながら立ち上がると、部屋のドアの方向へと歩いた。

「お前はずっと、その中から出られないんだよ」

それは、ギンジにぶつけた言葉と全く同じだった。いまこのときのための言葉だったんだ、と俺は思った。

(朝井 リョウ『何者』より)

問一、 傍線部 a～d のカタカナと同じ漢字を使う熟語を、それぞれア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

a 「コウ差」	「ア コウソク	イ コウスイ	ウ セイコウ	エ コウツウ
b 「オン暖」	「ア オンガク	イ キオン	ウ オンジン	エ オンビン
c 「ゲン象」	「ア キゲン	イ ゲンジツ	ウ ゲンゴ	エ ゲンイン
d 「リン郭」	「ア ネンリン	イ チクリン	ウ リンジ	エ リンジン

問二、 傍線部①「合あわなかつたんだよ、考え方が」とあるが隆良の考え方とはどのようなものか、当てはまるものを次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア 企画を考えるうえで重要なのはテーマであり、それを決めるためにもコラボ展は必ず行うという考え方。  
 イ 周囲からの評判が何よりも大事であり、そのためには公演を毎月行わなければならないという考え方。  
 ウ 公演の内容は考えに考え熟考を重ねたうえで、完璧なものを表現しなければいけないという考え方。  
 エ 人間にとって大事なものは自己実現であり、そのためには哲学者の思想を学ばねばならないという考え方。

問三、 傍線部②「会社に入るとかってホント、俺には向いてないんだなって思うわ」とあるが、そう考える理由を次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア 会社とは自分の考えを曲げて、人に合わせて働くところだと考えており、自分を殺して働くことに意味を見いだせないから。  
 イ 周囲の人々は自分にアーティストや編集者になることを望んでおり、それに応えることが自己実現につながると考えているから。  
 ウ 自由な時間で自由な服を着て新しい働き方することでクリエイティブな仕事ができるのに、会社に入るとそれがかなわないから。  
 エ 会社に入ると、結果よりも過程が求められ、完成度の低いものでも自分の中から答えを出すという風潮に耐えられないから。

問四、 傍線部③「の」と同じ用法で「の」が使われている文を、次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア 母の作つくったカレーライスはおいしかった。  
 イ あの日のことは今も心の中に残のこっている。  
 ウ ところで、この本は彼女かののだろうか。  
 エ 妹は、行くの行いかないのと騒さわいでいる。

問五、 傍線部④「決意」の熟語の構成を、A群のあくカの中から一つ選び記号で答えなさい。また、同じ構成の熟語を、B群のあくカの中から一つ選び記号で答えなさい。

- A群 ア 同じような意味の漢字を重ねたもの イ 反対または対応の意味を表す漢字を重ねたもの  
 ウ 上の字が下の字を修飾しているもの エ 下の字が上の字の目的語・補語になっているもの  
 オ 主語と述語の関係にあるもの カ 上の字が下の字の意味を打ち消しているもの

B群 ア 岩石 イ 因果 ウ 投球 エ 国立 オ 不安 カ 遠路

問六、 傍線部⑤「人生が線路のようなものだとしたら」に使われている表現技法を、次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 倒置法 イ 擬人法 ウ 隠喩法 エ 直喩法

問七、 傍線部⑥「中途半端な姿勢のままそこにいる」とあるが、この時の隆良の気持ちとして当てはまるものを次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 愉快 イ 嫌悪 ウ 感動 エ 困惑

問八、傍線部⑦「そう言ってくれる」とあるがどのようなことを言ってくれるのか、本文中から十字で抜き出さない。

問九、傍線部⑧「私たちはもう、そういう場所まで来た」とあるがどういうことか、当てはまるものを次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 周囲の勧めでアーティストや編集者を目指すようになったということ。

イ 自分ひとりで自分の人生を考えていかなければならないということ。

ウ 自分たちを産んでくれた時の両親の年齢に近づいてきたということ。

エ 何がどうなったかよりも何をどうするかが大切になったということ。

問十、傍線部⑨「何かを煮詰めてそれを表現したって」とあるが、「煮詰める」という言葉のここでの使い方と同じものを、次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 二人の意見の違いから会議が煮詰まってしまっ。 イ 彼は煮詰めたような表情でおもむろに歩き出した。

ウ 空の色が煮詰めたようになり星が見えなくなった。 エ 長い時間をかけて話し合い議論が煮詰まってきた。

問十一、「隆良」は自分をどのような人間だと思っていると、「瑞月」は考えているか、本文中から抜き出し始めと終わりの五字を答えなさい。

三 次の各問いに答えなさい。

問一、次の各文の傍線部を、主語にふさわしい敬語に直すとき正しいものを、それぞれア～ウの中から一つ選び記号で答えなさい。

① 私は先生にチケットをあげる。 【ア くださる      イ 差し上げる      ウ あげます】

② 母が担任の先生に会う。 【ア お会いになる      イ お目にかかる      ウ お会いになれる】

③ 私の作品を先生が見る。 【ア ご覧になる      イ 拝見する      ウ ご覧になれる】

問二、次の各文が【      】内の意味になるように、空欄に入る動物を、後のア～オの中からそれぞれ一つ選び記号で答えなさい。

① (      ) 脚をあらわす 【      隠していたことがばれること】

② (      ) をかぶる 【      本性を隠しておとなしく振舞うこと】

③ (      ) も木から落ちる 【      どんな名人でも失敗することがあること】

ア 犬      イ 馬      ウ 猿      エ 猫      オ 虎

問三、次のア～エの文を並び替えたとき、最後に来る文を記号で答えなさい。

ア それでも、私はその気持ちがうれしかった。      イ しかし、それは私の思っていたものではなかった。

ウ だから、その気持ちに私は感謝しようと思う。      エ 朝起きると枕元にプレゼントが置かれていた。

問四、次の文章から推測されるものとして正しいものを、後のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

球技大会の係を決めることになった。一人二つの係を持たなくてはならない中で、A君はバレーとサッカーを担当することになった。B君は一つはA君と同じだが、もう一つはA君の選んでいない野球を選んだ。C君は一つはA君と同じバレーを、もう一つはA君の選んでいないB君と同じものにした。D君はB君と同じサッカーとC君と同じ野球を選んだ。

ア B君はバレーと野球を選んでいる。

イ C君は両方ともA君と同じ競技を選んでいる。

ウ B君は両方ともD君と同じ競技を選んでいる。

エ A君とD君の共通する競技は野球である。